

高知大学 病院 ニュース

〔編集〕
高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長 森信 繁
〔発行人〕
高知大学医学部附属病院
病院長 横山 彰仁

地域医療ビジョン雑感

病院長 横山 彰仁

米 国ではトランプ大統領が誕生し、毎日ニュースに登場しています。当初は日本でも泡沫候補と見られ、突飛なアイデアを公約に挙げていた点からもヒラリー氏の圧勝が予想されていました。しかし、結局は普通の米国人の鬱積が限界に達していたということのようです。これまでの常識に基づく政策は大多数の市民の不利益につながり、経済の効率化は国内産業の空洞化をきたし、急速に富の偏在が生じてきたと実感していたわけです。確かに今や貧困層の35億人分に相当する資産をたった80人の最富裕層が握り、強い米国も今は昔のものとなり、テロも頻発し、明らかに全世界規模で安全が脅かされています。

こ れまでの常識とはかけ離れているように見える政策を着実に実施している現状は、“トランプ政権=過激派”としか言いようがありません。何をするのか先が見えない現状は面白いというも憚られるような恐ろしさを感じます。オプジーボという高額薬剤問題は、米国のように製薬会社と株主が儲かる一方で国民は貧乏になり(富の偏在を助長)、医学の進歩は金持ちだけが享受できる国となってゆく端緒になるのかもしれないという危惧もあり、日本では迅速な制度の変更がなされました。トランプ大統領でも変えることができないと思われませんが、保険会社と相談しながら診療するとか、自己破産の6割が医療費によるものであるなど、米国システムの悪い面が広く知られてきたわけです。

さ て、日本の人口は2010年から2015年の間に96万人減少し、1億2709万人となりました。その中で、現在の高知県の推計人口はわずか約71.9万人(男性が33.9万、女性が38万人)にすぎません。2010年には76.5万でしたから、たった6年間で4.5万人も減少したことになります。毎年

7000名くらいの人口減少があり、うち5000名が自然減で、2000人前後が転出によるものです。人口減は当然社会に大きな影響を与え、日本全体で週1万人の労働力(生産年齢人口)が減少している計算になるようです。

そ のような中、2025年(8年後)の医療供給体制の過不足を推測し対応を検討しようという試みが地域医療ビジョンです。2025年に高知県人口はさらに約6万人減少し、65.5万人と推計されています。昨年末策定された高知県地域医療ビジョンによれば、本院も属する中央医療圏では表のように急性期・慢性期病床がともに医療需要に比べ2000床以上過剰とされています。“**激変と競争が始まった高知県**”、これは市内の病院から発表された論文のタイトルです。このように、医療を求める人が大きく減少するなか一般病院には強い危機感があるわけです。

グ ローバリゼーションの本家と思っていた米国がアメリカファーストに変貌し、今後は日本でも大胆かつ過激な政策や中央視線の政策がやりやすくなったのではないかと思います。教育、医療政策はより大胆になるかもしれませんので、中央に対して見える形で少しでも実績を積み上げておくことが重要だと思います。本院は医育機関という異なった役割をもっており、地域医療ビジョンになじまない面もありますが、このような観点からも安穩とはしておれず、2025年問題の先駆けが今年の稼働率の低下として表れている可能性もあり、要注意です。本院の診療レベルが高いことは自負しているところですが、世間にはあまり知られていない面もあります。本院では人員的にこれ以上受け入れが困難な分野もあることは承知していますが、病院として余力のある診療分野では、今後も引き続き意識してより多くの患者さんに高度医療を届けていただきたいと思います。

医療機関所在地	医療機能	平成27(2015)年 病床機能報告における報告結果(A)	平成37(2025)年 必要病床数(B)	平成37(2025)年に向けた 病床数の過不足(A)-(B)
中央	高度急性期	889	834	55
	急性期	4,224	2,065	2,159
	回復期	1,308	2,493	-1,185
	慢性期※	5,674	3,370以上	2,304
	休床・無回答等	190		190
	小計	12,285	8,762以上	3,523

(『高知県地域医療構想(全文)』p.34 より引用)



退職のご挨拶

看護部長 楠瀬 伴子

高知医科大学時代からお世話になって早36年、長くも短くも感じる36年間、皆様方には大変お世話になり有り難うございました。この間、楽しいことばかりではなく辛いことや悲しいこともたくさんありましたが、ひとつひとつがよい思い出となっています。

看護師としてスタートの数年を東京の病院で過ごし、昭和56年の開院時に地元である高知へ戻ってきました。この頃は「自分たちでこの病院をつくるんだ」という強い思いを皆がもっていたように思います。手術部・集中治療室に配属になり、初経験の手術部ではお立ち台(器械台)に上り何とも言えない気持ちよさを感じ、次の専任夜勤を経験する中では社会人としてのマナーを再勉強しました。その後、整形外科病棟、小児科病棟、内科病棟、救急部・集中治療部を経て、平成14年から副看護部長、平成24年から看護部長を務めさせていただきました。様々な職種の方と接する中で、無理をお願いしたり無茶苦茶なことを言ったり、不快な思いやご迷惑をおかけしたことが多々あったと思いますが、この場をお借りしてお詫び申し上げます。多くの経験をさせていただき中、私自身成長させていただきました。“組織”そこに関係する“人”を大切に、笑顔をなくさないことをモットーに務めてきたつもりです。多くの方々に支援の手をさしのべてもらいながら、数々の苦難をどうにか乗り越えて来られたと思います。感謝しています。

これから世代交代が進む看護部ですが、一人ひとりが看護職として内的・外的キャリアを高めていって欲しいと思います。そして、ここぞという時の一致団結力をもって、病院組織への貢献、地域への貢献等、期待される部門としてより一層活躍されることを期待しています。

最後に、医療を取り巻く環境が大きく変わっていく中、ステップアップできるよい機会と捉え、この県になくてはならない魅力ある「おらんくの大学病院」として、医学部附属病院のさらなる発展と皆様のご活躍を願っております。



退職のご挨拶

検査部 臨床検査技師長 小倉 克巳

私は高知医科大学附属病院の開院年である1981年4月に就職して36年。今年3月末で定年退職となり、臨床検査技師長としての17年間を終えることとなります。

初代検査部長の佐々木匡秀教授に連れられて高知に来まして、初代の西田政明技師長を中心に8名の臨床検査技師で如何に検査部を立ち上げるかを検討した結果、検体を自動的に搬送する装置を考案・自作、自動分析装置の改造(メーカーの協力大)を行い「ベルトラインシステム」を完成させました。高知で新たに生み出した外部サンプリング方式や自動再検システム等は、現在市販されている検体搬送システムの基となっています。その後も産業用ロボットを用いた検査装置の考案等、新たな検査システムを検査部員の手で作り出し、工作室を持つ検査部として全国に知られるようになりました。

1999年に杉浦哲朗教授が二代目検査部長に就任され、2002年に二代目技師長を拝命しました。国立大学では最年少の臨床検査技師長であり、以後、技師長の若返りのきっかけとなりました。しかし、私はもっぱらの技術家であり管理面はまったく解らないまま無我夢中で、包括評価の導入や大学の統合に何とか対応してきました。その後も杉浦部長のご指示のもと、2006年には組織強化を目的にISO9001、2013年には検査室の第三者評価としてISO15189を取得(国立大学として13番目)する等、大学として先進的な運営をすることができました。検査システムの更新に関しましても、2006年に「検体系検査統合システム」を導入、そして昨年1月にはシステムの更新と、3度の大きなシステム更新に関わることができたことを光栄に思っております。

この36年間に多くの方々との出会いがあり、多くのご支援を頂き、技師長としての職務を終えることができます。心より御礼申し上げます。

現在、検査部職員は事務職員を含めて51名になりました。昨年4月に松村敬久教授が三代目検査部長に就任され、今年4月からは新しく山中茂雄技師長になり、新生検査部が稼働します。真価が問われる時代になると思いますが、臨床から求められる検査部に進化できますように、皆様の温かいご支援を宜しくお願い致します。

最後になりますが、高知大学医学部附属病院のさらなる飛躍を祈念しまして退職の挨拶とさせていただきます。

高知大学医学部附属病院における災害への備え

～ 医学部総合防災訓練を行いました ～

11月11日(金)、医学部総合防災訓練を実施しました。
 この訓練は、職種を問わず医学部に勤務する全員を参加対象として毎年行っており、
 午後の外来診療を原則休診とさせていただいております。
 患者さんをはじめ、多くの方々のご協力のおかげで、今回も盛り多い訓練となりました。
 厚くお礼申し上げます。



今回の訓練では、「南海トラフ巨大地震」が平日の昼間に発生し、県内各所から負傷者が搬送されることを想定し、災害対策本部初動からトリアージ(※1)実働を組み込んだシナリオで行いました。

最近3年間は、担当役割や行動表・役割カード(※2)を事前に提示し、各自が担当役割の内容と配属チームの指揮系統を明確に把握する「チームビルディング」を重視して実施してきました。訓練後のコメントは、以前よりも具体的かつ詳細になってきていますが、これはチームビルディングと実働の積み重ねにより、参加者の意識とスキルが向上した結果だと言えます。

訓練概要は、以下のとおりです。

災害対策本部訓練

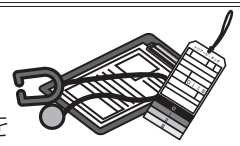
災害対策本部構築(チームビルディング)後、各病棟・部署からの人的・物的被害状況報告を集約し、各部署やトリアージ訓練各エリアに対応の指示を行いました。

情報伝達・被害状況集約訓練

災害対策本部への被害状況報告等、本部～各部署間の情報伝達を行いました。

トリアージ訓練

直前講義として、訓練の要点、チームビルディングの手順の確認を行い、続いて、模擬患者を配置し、トリアージから安定化処置までの一連の流れを実施しました。



当日は『国立大学附属病院災害対策相互訪問事業』(※3)の一環で、岡山大学病院より9名の方々が来学され、訓練を見学していただき、医学部全体で訓練に取り組んでいること、訓練項目も多岐に亘る点などについて、高い評価をいただきました。

また、県内の他の災害拠点病院からの見学もあり、訓練を通じた交流も図ることができました。

これも、皆様方のご理解・ご協力があったからこそ、重ねてお礼申し上げます。

『災害に強い病院』であるため、これからも実施方法を工夫しながら訓練を重ねていきますので、今後ともよろしく願いいたします。



災害対策本部活動中



栄養管理部では炊出し訓練を実施し、災害対策本部へ



重症エリアでの情報把握



反省会で総括を行う災害対策本部長(医学部長)

- ※1 トリアージ…災害時・非常時に、多数傷病者のそれぞれの緊急度や重症度を判定して治療や後方搬送の優先順位を決めること
- ※2 行動表・役割カード…訓練参加者が取るべき行動を記載したもので、各エリアに用意している。行動表は壁等に掲示してエリア全員が参照し、役割カードは全参加者がそれぞれ携帯することを前提に作成
- ※3 国立大学附属病院災害対策相互訪問事業…全国の国立大学病院の災害対策向上のため、地域ブロックごとに相互訪問を行い、検証を行う事業

治験貢献賞表彰

高知大学医学部附属病院では、治験に貢献された医師に病院長より表彰状を贈呈しています。承認前の医薬品の安全性、有効性を確認する治験に貢献された医師を表彰することで、治験に対する理解とモチベーションを高めることを目的としています。

本年は、平成28年12月7日に治験貢献賞授与式を開催し、平成27年度に本院で行われた治験においてご活躍された、右記の先生方を表彰しました。

◆治験貢献賞(敬称略)

1位	泌尿器科 助教 島本 力
2位	眼 科 助教 松下 恵理子
3位	精神科 講師 上村 直人

◆治験実施優秀チーム賞(敬称略)

同率	血液・呼吸器内科 講師 大西 広志
同率	神経内科 講師 大崎 康史



永年勤続表彰

永年勤続の表彰式が平成28年11月22日に朝倉キャンパスで行われました。
岡豊キャンパスからは次の8名の方が表彰されました。

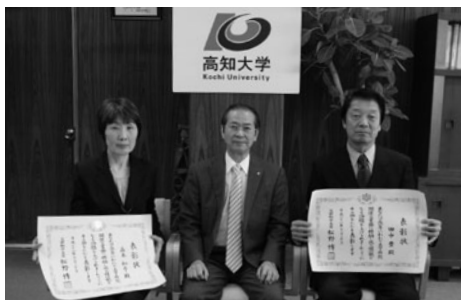
(敬称略)

◆ 基礎医学部門	坂野 政之
◆ 検査部	久原 太助
◆ 看護部	岩崎 眞代
◆ 看護部	小原 志津
◆ 看護部	常光 由香里
◆ 看護部	中田 理恵
◆ 看護部	西川 知佐
◆ 医事課	貞弘 展広



20年間お疲れさまでした。今後ともよろしくお願ひします。

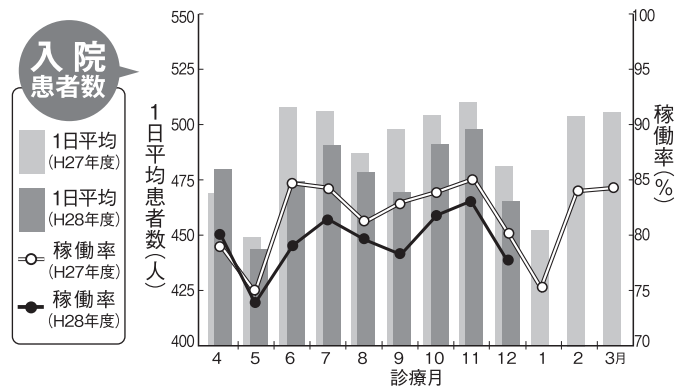
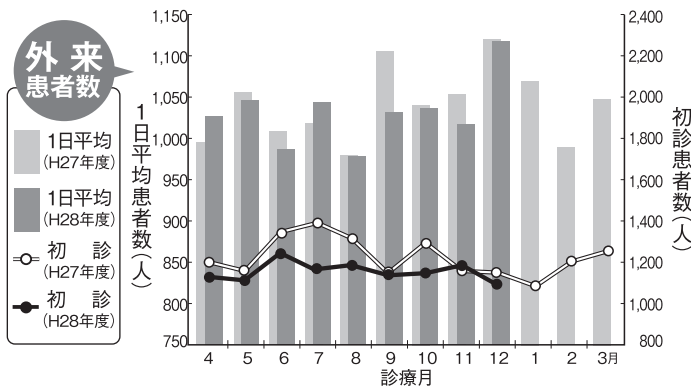
医学教育等関係業務功労者表彰



文部科学大臣は毎年、医学又は歯学に関する教育・研究、もしくは患者診療等の補助的業務に関し、顕著な功労のあった方を表彰しています。

平成28年度も、この表彰式が11月22日に東京で行われ、本院の受賞者である看護部 森本 和子副看護部長と、栄養管理部 田中 豊副主任調理師の両名に、表彰状及び副賞が贈呈されました。

診療状況



編集後記

みなさま、病院ニュースを読んでおられますでしょうか。ましてや編集後記までしっかり読み込んで頂いている方はどれくらいおられるかわかりませんが、そんな病院ニュースの編集委員の末席に最近参加させて頂きました。この病院に勤務して●年経ちますが、正直に申しますと病院ニュースに編集委員会が存在する事すら知りませんでしたし、ましてやこんなに重鎮の方々(私除く)がこんなに真剣に委員会で話し込んでいるとは露とも知らず勤務しておりましたので、病院ニュースを読まずにすぐ捨てていた

過去の私自身を叱責したい気持ちにかられています。病院ニュースをしっかり読んでいれば委員会の存在を知っていたと思いますし、他にも有用な情報を知らずに過ごしていた事と思いますので、皆様には是非隔々まで病院ニュースを読んで頂いて、病院内の出来事に気を配って頂ければと思います。今後とも委員会の末席で出来るだけ伝わりやすい紙面作りのお手伝いが出来ればと考えておりますので、忌憚なく意見をお聞かせ下さい。

(文責：岡崎 瑞穂)